

平成二十六年四月二十八日(月)晴

謂はゆるSTAP細胞を繞り、その論文の正當性に就き問題發生、理研の調査委員會は、論文の捏造を認むるも、件の委員長自らの論文に類似の疑惑指摘せらるゝに及び、委員長辭任に迫られたりと云々。今後如何なる展開となるや豫斷を許さざれば、輕率の論戒むべけれど、前半生に於て科學論文を幾許かものせし經驗を基に一般論として科學論文の報道に就き私見を述べむとす。

科學者にとり論文は評價を受くる唯一の對象にして、數學など論理科學にありては査讀者による論理性の確認、實驗科學にありては再現實驗が必須なり。その意味にて最近興味ある事例二つに遭ふ。一つは十七世紀の大數學者フェルマーの豫想せる最終定理の證明なり。三百五十年以上の永きに亙りて證明を拒みけるが、遂に一九九三年アンドリユー・ワイルズが證明に成功せり。然るに査讀による點檢不備を發見す。然あれども彼は特に名譽を失はず、その不備の解決に努め、翌年遂に完全證明を達成せり。他の一つは素粒子論に於けるスーパー・ストリング理論にして、その數學的構造に就き、數多の論文提出せられ、不備無きこと證明濟なれども、實驗データを得る手立てなきま、今日に至る。これ科學の基本概念たる、假説、論理的推論、實驗による檢證を通じて假説を法則化せしむる手順を満足せずとする論もある中、これを科學的眞實と信ずる物理學研究者も亦多しと聞く。

今や人知大いに進み、未知の領域は最早常識、直觀の範圍を遙かに越え、難解のべールに覆はれ、或いは神の領域を思はしむ。かくて論文の評価は勿論、内容の理解さへ一般常識人には不可能に近し。十九世紀の物理學者ファラデーは率先して科學知識の普及に努め、二十世紀前半まで人類は曲りなりに科學の進歩を實感せり。その驅動力として中等教育にて學習し得る微分積分にて概ね理解可能なるを擧ぐべし。然るを前世紀後半以降は群表現論など高等數學の理解を前提とするに至る。不幸にもかゝる數學の分野は大學にても殆ど學習の機會なく、放置せば一般人は論文の結論のみを強制せられ、恰もかの僧正が自らの屍體より發する惡臭によりその聖性を否定せらるゝに似たる世相ともなりぬべし。今日的「蠟燭の科學」の切望せらるゝ、所以なり。

一方興味深き内容の論文は當然報道の對象なれば、高度に専門的内容を如何に解り易くしかも科學的正確さを失はず解説するかメディアの實力の間はるゝ所なり。記者諸氏が難解なる内容の理解に努め、解説記事の充實に注力せば、論文に疑義生じたる際、問題の核心を論文中に求め、著者との科學的問答も可能となるべし。これを怠り研究者の人柄、逸話の紹介にて濟まさばその害大にして、今回の記者會見の如く「ネイチャー」掲載の論文自體を對象とする討論少く、一般的の彌次馬的質問に終始しつと見えたるは、記者の勉強不足を疑はせ、以てこれを遺憾とせざるを得ず。